044

日蓮大聖人御書全集

二乗作仏事（にじょうさぶつじ）

新版654～661

二乗作仏事

文永後期

爾前得道の旨たる文。経に云わく「諸の菩薩を見る」等云々。また云わく「始見我身（始め我が身を見る）」等。これらの文のごときは、菩薩、初地・初住に叶うこと有ると見えたるなり。故に、「諸の菩薩を見る」の文の下には「しかも我らはこの事に預からず」と。また「始見」の文の下には「先より修習せるをば除く」等云々。これは、爾前に二乗作仏無しと見えたる文なり。

問う。顕露定教には二乗作仏を許すや。顕露不定教には
これを許すか。秘密にはこれを許すか。爾前の円には
二乗作仏を許すや。別教にはこれを許すか。
答う。詮ずるところは、重々の問答有りといえども、皆
これを許さざるなり。詮ずるところは、二乗界の作仏を許さ
ずんば、菩薩界の作仏も許さざるか。衆生無辺誓願度の願
の闕くるが故なり。釈は、菩薩の得道と見えたる経文を
消するばかりなり。詮ずるところ、華・方・般若の円の菩薩
も初住に登らず。また凡夫・二乗は勿論なり。「一切衆生

を化して、皆仏道に入らしむ」の文の下にて、このことは意得べきなり。

問う。円の菩薩に向かっては二乗作仏を説くか。

答う。説かざるなり。「いまだかつて人に向かって、かくのごとき事を説かず」の釈に明らかなり。

問う。華厳経の「三つは差別無し」の文は十界互具の正しき証なりや。

答う。次下の経二十五に云わく、「如来の智慧の大薬王樹は、ただ二所のみを除く。生長することを得ざればなり。

いわゆる、声聞と縁覚となり」等云々。二乗作仏を許さずということ分明なり。もししからば、本文は十界互具と見えたれども、実には二乗作仏無ければ、十界互具を許さざるか。その上、爾前の経は法華経をもって定むべし。既に「先より修習せるをば除く」等云々と云う。華厳は菩薩に向かって二乗作仏無しと云えること分明なり。方等・般若もまたもってかくのごとし。

総じて、爾前の円に意得べき様二つ有り。一には、阿難結集の已前、仏は一音に必ず別・円二教の義を含ませ、

一々の音に必ず四教・三教を含ませたまえるなり。故に、純円の円は爾前経には無きなり。故に、円といえども、今の法華経に対すれば別に摂むと云うなり。籤の十に「また一々の位に皆普賢・行布の二門有り。故に知んぬ、兼ねて円門を用いるも別に摂むることを」と釈するなり。この意にて爾前に得道無しと云うなり。二には、阿難結集の時、多羅葉に注し、一段は純別、一段は純円に書けるなり。方等・般若もかくのごとし。この時は、爾前の純円に書ける処はほぼ法華に似たり。「住の中には多く円融の相を明

かす」等と釈するは、この意なり。天台智者大師はこの道理を得給いし故に、他師の華厳など総じて爾前の経を心得しにはたがい給えるなり。

この二つの法門をばいかにとして天台大師は心得給いしぞとさぐれば、法華経の信解品等をもって、一々の文字は別・円の菩薩および四教・三教なりけりとは心得給いしなり。またこの智慧を得るの後、彼らの経に向かって見る時は、一向に別、一向に円等と見えたる処あり。阿難結集の後のしわざなりけりと見給えるなり。

天台一宗の学者の中にこの道理を得ざるは、爾前の円と法華の円と始終同じき義と思うが故に、一処のみの円教の経を見て一巻二巻等に純円の義を存する故に、彼の経等において成仏・往生の義理を許す人々これ多きなり。華厳・方等・般若・観経等の本文において、阿難、円教の巻を書く日に、「即身成仏」云々、「即得往生」等とあるを見て、一生乃至順次生に往生・成仏を遂げんと思いたり。

阿難結集已前の仏口より出だすところの説教にて意

を案ずれば、「即身成仏」「即得往生」の裏に歴劫修行・永不往生の心を含めり。句の三に云わく、摂論を引いて云わく「了義経は文に依って義を判ず」等という意なり。爾前の経を文のごとく判ぜば仏意に乖くべしということは、これなり。記の三に云わく「法華より已前は不了義なるが故に」と云えり。この心を釈せるなり。籤の十に云わく「ただこの法華のみ前教の意を説いて今経の意を顕す」。釈の意はこれなり。

そもそも、他師と天台との意の殊なる様はいかん。他師

は、一々の経々に向かって彼の経々の意を得たりと謂えり。天台大師は、法華経に仏四十余年の経々を説き給える意をもって諸経を釈する故に、阿難尊者の書きしところの諸経の本文にたがいたるようなれども、仏意に相叶いたるなり。しばらく観経の疏のごとき、経説には見えざれども、一字において四教を釈す。本文は、一処は別教、一処は円教、一処は通教に似たり。釈の四教に亘るは、法華の意をもって仏意を知りたもうが故なり。阿難尊者の結集する経にては、一処は純別、一処は純円に書き、

別・円を一字に含する義をば法華にて書けり。法華にして爾前の経の意を知らしむるなり。

もししからば、一代聖教は反覆すといえども、法華経無くんば一字も諸経の心を知るべからざるなり。また、法華経を読誦する行者も、この意を知らずんば法華経を読むにてはあるべからず。爾前の経は、深経なればといって浅経の意をば顕さず、浅経なればといってまた深義を含まざるにもあらず。法華経の意は、一々の文字は皆爾前経の意を顕し法華経の意をも顕す故に、一字を

読むは一切経を読むなり、一字を読まざるは一切経を読まざるなり。もししからば、法華経無き国には、諸経有りといえども得道は難かるべし。滅後に一切経を読むべきの様は、華厳経にも必ず法華経を列ねて彼の経の意を顕し、観経にも必ず法華経を列ねてその意を顕すべし。諸経もまたもってかくのごとし。しかるに、月支の末の論師および震旦の人師、この意を弁えず。一経を講じて各我得たりと謂い、また諸経に超過するの謂いを成せるは、かつて一経の意を得ざるのみにあらず、謗法の罪に堕

つるか。

問う。天竺の論師、震旦の人師の中に、天台のごとく阿難結集已前の仏口の諸経をかくのごとく意得たる論師・人師これ有るか。

答う。無著菩薩の摂論には四意趣をもって諸経を釈し、竜樹菩薩の大論には四悉檀をもって一代を得たり。これらはほぼこの意を釈すとは見えたれども、天台のごとく分明には見えず。天親菩薩の法華論も、またもってかくのごとし。震旦国においては、天台より以前の五百年の間に

は一向にこの義無し。玄の三に云わく「天竺の大論すら、なおその類いにあらず」云々。

籤の三に云わく「一家の章疏は理に附し教に憑る。よそ立つるところの義は、他の人、その弘むるところに随ってひとえに己が典を讃むるに同じからず。もし法華を弘むるも、ひとえに讃むることなお失なり。いわんやまた余をや」文。「何となれば、既に開権顕実と言えば、何ぞ一向に権を毀るべけんや」。

華厳経の「心、仏および衆生、この三つは差別無し」

の文は、華厳の人師この文において一心・覚・不覚の三義を立つるは、源、起信論の名目を借りてこの文を釈するなり。南岳大師は妙法の二字を釈するに、この文を借りて三法妙の義を存せり。天台智者大師はこれを依用す。ここにおいて天台宗の人は華厳と法華と同等の義を存するか。また澄観は「心、仏および衆生」の文において一心・覚・不覚の義を存するのみにあらず、性悪の義を存して云わく、澄観の釈に「彼の宗にはこれを謂って実となす。この宗の立義、理として通ぜざることなし」等云々。これ

らの法門許すべきや不や。

答えて云わく、弘の一に云わく「もし今家の諸の円文の意無くんば、彼の経の偈の旨、理として実に消し難からん」。同じく五に云わく「今の文を解せずんば、いかんぞ『心は一切を造る。三つは差別無し』を消解せん」文。記の七に云わく「いるかせにしてすべていまだ性悪の名を聞かず」と云えり。これらの文のごとくんば、天台の意を得ずんば彼の経の偈の意知り難きか。また震旦の人師の中には天台の外には性悪の名目あらざりけるか。また法華経にあら

ずんば一念三千の法門談ずべからざるか。天台已後の華厳の末師ならびに真言宗の人、性悪をもって自宗の依経の詮となすは、天竺より伝わりたりけるか、祖師より伝わるか、また天台の名目を偸んで自宗の内証となすと云えるか。能く能くこれを験うべし。

問う。性悪の名目は天台一家に限るべし。諸宗にはこれ無し。もし性悪を立てずんば、九界の因果をいかんが仏界の上に現ぜん。

答う。義例に云わく「性悪、もし断ぜば」等云々。

問う。円頓止観の証拠と一念三千の証拠に、華厳経の「心、仏および衆生、この三つは差別無し」の文を引くは、彼の経に円頓止観および一念三千を説くというか。

答えて云わく、天台宗の人の中には、爾前の円と法華の円と同の義を存す。

問う。六十巻の中に、前の三教の文を引いて円の義を釈せるは文を借ると心得、爾前の円の文を引いて法華の円の義を釈するをば借らずと存ずるや。もししからば、三種の止観の証文に爾前の諸経を引く中に、円頓止観の証拠に

華厳の「菩薩、生死において」等の文を引けるをば、妙楽釈して云わく「還って教味を借りて、もって妙円を顕す」。この文は諸経の円の文を借ると釈するにあらずや。もしからば、「心、仏および衆生」の文を一念三千の証拠に引くことは、これを借れるにてあるべし。

答う。当世の天台宗は華厳宗の見を出でざることを云うか。華厳宗の心は、法華と華厳とにおいて同・勝の二義を存す。同は、法華・華厳の所詮の法門はこれ同とす。勝には二義あり。古の華厳宗は、教主と対菩薩衆等の勝の義

を談ず。近代の華厳宗は、華厳と法華とにおいて同・勝の二義有りと云々。その勝においてまた二義ありという。

迹門は華厳と同・勝の二義あり。華厳の円と法華迹門の相待妙の円とは同なり。彼の円も判麤、この円も判麤の故なり。籤の二に云わく「故に、二妙を須って、もって三法を妙ならしむ。故に、諸味の中に円融有りといえども、全く二妙無し」。私志記に云わく「昔の八の中の円は、今の相待の円と同じ」と云えり。これは同なり。記の四に云わく「法界をもってこれを論ずれば、華厳にあらざるなし。仏慧をも

ってこれを論ずれば、法華にあらざるなし」云々。また云わく「応に知るべし、華厳の尽未来際は即ちこれこの経の常在霊山なり」云々。これらの釈は爾前の円と法華の相待妙とを同ずる釈なり。

迹門の絶待開会は永く爾前の円と異なり。籤の十に云わく「この法華経は、開権顕実・開迹顕本す。この両意は永く余経に異なり」と云えり。記の四に云わく「もし仏慧をもって法華となさば、即ち」等云々。この釈は、仏慧を明かすは爾前・法華に亘り、開会はただ法華に限ると見えた

り。これは勝なり。爾前の無得道なることは分明なり。その故は、二妙をもって一法を妙ならしむるなり。既に爾前の円には絶待の一妙を闕く。衆生も妙の仏と成るべからず。故に、籤の三に云わく「妙変じて麤となる」等の釈これなり。華厳の円変じて別と成るという意なり。

本門は、相待・絶待の二妙ともに爾前に分無し。また迹門にもこれ無し。爾前・迹門は異なれども、二乗は見思を断じ菩薩は無明を断ずと申すことは、一往これを許して再往はこれを許さず。本門寿量品の意は、爾前・迹門におい

て一向に三乗ともに三惑を断ぜずと意得べきなり。

この道理を弁えざるのあいだ、天台の学者は、爾前・法華の一往同の釈を見て永異の釈を忘れ、結句、名は天台宗にてその義分は華厳宗に堕ちたり。華厳宗に堕つるが故に、方等・般若の円に堕ちぬ。結句は善導等の釈の見を出でず。結句、後には謗法の法然に同じて、「師子身中の虫の自ら師子を食むがごとし」文〈仁王経の下〉。「大王よ。我滅度して後、未来世の中の四部の弟子、諸の小国の王・太子・王子乃ちこれ三宝を任持して護る者、転たさらに三宝を滅

し破せんこと、師子身中の虫の自ら師子を食むがごとし。外道にはあらず。多く我が仏法を壊り、大罪過を得ん」云々。

籤の十に云わく「始め住前より登住に至るこのかた、全くこれ円の義なり。第二住より次の第七住に至る文相次第して、また別の義に似たり。七住の中において、また一多相即自在を弁ず。次の行・向・地、またこれ次第・差別の義なり。また一々の位に皆普賢・行布の二門有り。故に知んぬ、兼ねて円門を用いるも別に摂むることを」。